

序 文

手術に伴う危険。これは臨床家にとって重大な問題である。扁桃手術に起こるショック死、副鼻腔手術における視神経傷害、耳の手術における顔面神経麻痺など、これにからまる医療過誤の法律問題はだんだんに険悪になつてくる。患者の権利主張が年毎に強くなつて医師の敗訴が増えてゆく傾向だという。

アデノイド手術が乙種では540円、扁桃摘が1360円で1度ショック死でもあれば数十万円から百万円の損害賠償が請求される。生命の尊さは金銭に換算されぬとは言え、医師もたまらぬ。ジックリ考えて手術に対処する時間的精神的の余裕を健保制度は与えてくれないから触らぬ神に祟りなしと医師は手術を避けるようになる。これでは医療の進歩の妨げともなり患者にとつても不幸である。この不合理の是正は然るべき方面に任せて、さし当つては手術の危険を防ぐことに努力せねばならぬ。この意味でこの特集号が編集されたのである。

ところで1968年ドイツの Herrmann 教授が Gefahren bei Operationen an Hals, Ohr und Gesicht und die Korrektur fehlerhafter Eingriffe. Springer 社という良い本を出している。733頁で小さな活字でビッシリ印刷されているが、それでいて趣旨から一步も離れていない叙述には驚嘆した。特集号の論文が趣旨からはみ出して手術法の解説に脱線する傾向が多かつただけにそれを痛感したのである。私としても手術の危険だけを書けと言われると平生心がけていないだけに閉口するから執筆者諸賢の困惑も判るが、ヘルマン教授のこの点における合理性、巨細に渡る神経の行き届いた叙述には頭が下がった。ドイツ人の本質をまざまざと見せられた思いがした。実に良書である。これを日本語に翻訳して日本で出版してくれと頼まれたので、私は大いに意気こんだのである。四千人の日本耳鼻咽喉科会員であるから購読してくれる人数は十分あろうと思つたのであるが、さて医学書院に Springer 社に交渉して貰つたところ版權、翻訳料、印税その他の点でどうしても折り合いがつかず挫折してしまつた。誠に残念であつた。もつとも健康保険の点数に終始頭をつかつている会員諸君、手術を避けている開業医諸君、3万円を越す本書の高価さから考えると果してどれだけ購読して貰えるかという不安もあつた。それで抄録でもと考へたが、そうなるとヘルマン氏がやるかわれわれがやるか、これも難しい問題で行きづまり結局断念するより他なかつた。

しかしこの特集号とヘルマン書とには各々長短があるので、両方を読むと理想的な内容になると感じた。あとがきで少しそれに触れて見たいと思う。

(編集者記す)